

かんがえよう これからの 地域の未来。

平成31年2月 地域コミュニティを考えるワークショップ開催報告

I. 開催趣旨

地域では、まちづくりや防災、福祉、青少年育成等の団体が様々な地域活動に取り組まれています。近年では、少子高齢化や価値観の多様化等を背景として、担い手不足等の課題があり、地域のつながりが希薄化している所も見受けられます。

しかしながら、地域の課題解決や住民共通の思いや願いを社会全体に反映していくうえで、地域コミュニティ、住民相互の助け合いは重要なものであると考えており、まちづくりの担い手である地域住民を対象とし、宇治市の地域コミュニティの未来に向け、今、何が必要なかを考えていただく場としてワークショップを開催しました。

本ワークショップは、高知工科大学・京都文教大学との共催により、将来世代の視点・利益を反映する「フューチャー・デザイン」という手法を取り入れることで、既成概念にとらわれない、自由な発想で宇治市の地域コミュニティの未来を描くことにより、参加者がこれまでとは異なる視点を得ることで、今後の地域活動の一助となればと考えております。

また、宇治市の現状や地域実態、活動の課題等についての理解を深め、幅広い世代での意見交換や情報共有の場を設ける事で地域の主体的な活動を支援するとともに、地域間の連携や交流を促すことで、地域コミュニティの活性化に繋がるものと考えております。

フューチャー・デザインとは

現在の意思決定が、将来世代に多大な影響を及ぼすような意思決定である場合、存在しない将来世代のことだけを考える集団「仮想将来世代」を構築し、現世代とその集団が交渉して、物事を決めていくような枠組みを考えたらどうかというものである。

現代を支える2つの仕組みである市場制と民主制は、現世代の利益を実現するための仕組みであり、将来世代を取り込む仕組みではない。人は目の前のことに心を奪われ、将来のことを楽観的に判断しがちなため、将来世代を十分に配慮しての判断が出来ず、存在しない将来世代の声は届かないため、将来世代の様々な資源を「惜しみなく奪っている」のが現世代である。

この大きな課題に対処するため、存在しない将来世代に代わって「仮想将来世代」を現世代に導入し、新たな社会を創造する枠組みが「フューチャー・デザイン」である。

<参考文献>西條辰義編(2015),『フューチャー・デザイン 七世代先を見据えた社会』勁草書房

II. 開催概要

- ◇ 開催日時 1回目 平成30年10月28日(日) 14時～16時
- 2回目 平成30年11月23日(金・祝) 14時～16時
- 3回目 平成30年12月15日(土) 14時～16時
- 4回目 平成31年 1月26日(土) 14時～16時
- ◇ 会場 宇治市役所 8階 大会議室 / うじ安心館 3階 ホール
- ◇ 参加者 32名(各回、欠席者あり)

◇ 実施方法

参加者4名にスタッフ（進行役、書記役）2名を加えた6人を1つのグループとして、計8つのグループにてワークショップを実施した。

なお、京都文教大学、高知工科大学、東京大学の学生に協力いただき、進行役を学生、書記役が市職員を基本とし、グループ討論を中心に実施した。（一部変更有）

III. 構成



現世代の視点から考える

宇治市の財政状況や地域支援策、地域の現状等の説明を行ったうえで、各グループに分かれ、2018年を生きる現世代として、2048年の宇治市の地域コミュニティの将来について検討した。

- ◇ 講演「宇治市における地域コミュニティの現状について」
講師：宇治市文化自治振興課職員
- ◇ 宇治市の地域コミュニティの将来像に関するグループ討論



過去を知る

市職員OBと現職の市職員により、約40年前の宇治市の状況や時代背景を踏まえながら、当時のコミュニティ施策の推進にあたっての思い等を対談形式にてお話しいただき、そのお話を聞いていただいた上で、各グループに分かれ、2018年を生きる現世代として過去の市や住民等に対し、メッセージを送る。

- ◇ 対談「地域活動支援策に関わる当事者の思い」
登壇者：五艘 雅孝氏（市職員OB）× 宇治市文化自治振興課長
コーディネーター：森 正美氏 京都文教大学総合社会学部教授
- ◇ 過去の宇治市に対するグループ討論



将来世代の視点で考える（1）

「フューチャー・デザイン」についての講演と実際に「フューチャー・デザイン」を活用したワークショップの様子がわかる紙芝居を上映した上で、各グループに分かれ、2048年の世界に生きる将来世代として、2048年の宇治市の地域コミュニティの姿を描いた。

- ◇ 講演「フューチャー・デザイン」
講師：西條 辰義氏 総合地球環境学研究所特任教授
高知工科大学フューチャー・デザイン研究所所長
- ◇ 紙芝居上映「将来世代になりきるとは？」
- ◇ 2048年に生きる将来世代となり宇治市の地域コミュニティを描くグループ討論



将来世代の視点で考える（2）

3回目に引き続き、各グループに分かれ、2048年の世界に生きる将来世代として、2048年の宇治市の地域コミュニティの姿を描き、その姿にたどり着いた過程を整理した。

- ◇ 2048年に生きる将来世代となり宇治市の地域コミュニティを描くグループ討論

IV. グループ討論における主な意見等について

< 1回目> 現世代の視点から考える

今（2018年）の状況を踏まえ、30年後（2048年）の宇治市の地域コミュニティはどんな姿であって欲しいか、また、その姿を実現するために、今（2018年）からどのようなことを行っていくべきかを考えた。

地域の現状について	<p><地域・社会></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 町内会に意義を感じていないため、役員のなり手もない ● 自らのことに関係するものでなければ関わりたくない、関わる余裕がない ● 世代間のつながりが途絶えている、世代間で考え方や発想自体が違う ● 地域内で基本的な情報の共有が出来ていない
30年後の地域コミュニティの姿について	<p><地域・社会></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 色々な世代がいるのが地域、排除ではなく誰でも受け入れる地域 ● 昔のように、近所同士すぐ声を掛けられる、助けに行けるようなまち ● 新しい提案を実現していけるような、柔軟な対応が可能な組織づくり ● 若手や新しい人が進んでできる環境・体制をいかにして整えられるか ● 地域の問題を共有できるようなシステム <p><大学> 大学が地域や企業、行政と連携し、地域の中心</p> <p><NPO> 地域のために働こうと思うNPOが担い手になっている</p> <p><市民> 全てを行政任せではなく、住民主体で動くことが必要な時代になる</p>
今後どのようなことをしていくべきか	<p><地域・社会></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 役員のみから仕事を分担、3年や5年単位で継続的に動ける組織を別に作る ● 防災等の共通の目的を設定し、目標に向かうことで活性化に繋げる ● 地域の人との触れ合い、つながりをつくる機会や地域の将来を考える場作り ● 顔の見えるネットワークは大切だが、それだけでは難しい部分をICTで補う ● 仕事を辞めた方の社会・人生経験を地域活動に活かしていただく仕掛け作り ● 参加を躊躇している人に対し、参加を促せるような仕組みをつくる ● それぞれの地域に魅力や特徴をつくる ● 自ら動く人を増やしていく ● 地域の助け合いを有償のボランティアとし、地域でお金が循環するように ● 定年制度をなくし、働ける人は働く <p><行政></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 仕掛けやきっかけをつくって、地域を先導する ● 地域にお金を渡して、地域の裁量で自由に使用できるようにする <p><施設> 使用されていない集会所をサークルや趣味等の交流の場として活用</p>
その他意見	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会に高齢社会に対応する準備がない ● 生活基盤がだいぶ変化しており、生活の時間帯や環境も世帯によって違う ● 町内会に行政が絡むのは合わない、行政が絡むと役割が増える ● 個人情報保護法が情報共有のネックになっている

< 2回目 > 過去を知る

◇ 過去の宇治市に対するグループ討論

過去約40年間の宇治市（市民・行政・議会）に対して、現在から、どのようなメッセージ（リクエストや感謝など）を送りたいか話し合った。

意見やリクエスト	<p><行政></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 総合計画10年単位は短い、また1～5次までのつながりを示してほしい ● 行政の計画ではPDCAが見えにくい、可視化して欲しい ● 行政と意見交換や交流する場がなかった、地域にもう少し配慮してほしい ● 市民にお願いしたいことを明確にしてくれれば、協力できたこともあったはず ● もっと早く、高齢化社会に向けた対策に取り組んで欲しい ● 企業誘致を行い、税収の確保を考えてほしい ● 観光誘致の面で、飲食店や宿泊施設をつくってほしい ● 国際化をみこしたビジョン、都市計画を持ってほしい ● 役割分担として市役所内でも関係部署が連携できていない ● 集会所を用意するだけでなく、「自治」を育てるような教育が必要だった ● 使用頻度や地域性などの違いがあり、集会所の一律整備はどうかと思う ● 人口増加に伴い学校を整備したが、近くに建てすぎたのではないか <p><市民・地域></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 個人の生活環境は向上したが、地域での助け合いはなくなった ● 自治会の運営や課題などを「見える化」をして欲しい ● 地域の行事等をもっと開催して、ふれあえる機会をつくってほしい ● 地域での活動を若い方に引きついでいてほしい <p><社会></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 40年前は時代の変化が激しく、市も市民も未熟だった
感謝	<p><行政></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 宅地開発や都市づくり、下水道整備等に取り組んだことで生活はよくなった ● 天ヶ瀬ダムで洪水の心配がなくなった ● 観光都市としての「宇治」や「宇治茶」は全国的に知られている ● 昔は行政が全部してくれる、任せておけばよかった ● 集会所の数が増えたことで、交流の場ができ、つながりを作るためにも役立った <p><市民・地域></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 地蔵盆という風習は、地域でのつながりを育て、子供にも楽しみなものだった ● 地域イベントをたくさん開催してくれたことで、地域が元気だった <p><大学> 京都文教大学ができたおかげで、地域が活性化した</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本全体に「次世代」という視点がなかったのではないか ● 高齢化により社会がどうなるかは最近になるまで分からなかった ● 公共・行政の役割が時代によって変わってきている ● 行政サービスが見えないため感謝を感じない

＜3・4回目＞将来世代の視点で考える

- ◇ 2048年に生きる将来世代となり宇治市の地域コミュニティを描くグループ討論
今から30年後、2048年の世界にタイムスリップしたと仮想し、2048年の地域コミュニティの姿について、過去（2018年）と比較し、どのように変わっているのか、具体的に描いた。そして、将来世代として描いた2048年の宇治市の地域コミュニティの姿に辿り着くまでの過程について話し合った。

2048年の宇治市の地域コミュニティについて

＜社会＞

- ・ 少子高齢化は進展しているが外国人が増加し、国際的な地域となっている
- ・ 超高齢化社会・人口減少により、ロボットが労働、労働者の中に加わっている
- ・ 医療の発達により健康もコンピューターで管理できるようになったことで寿命も延び、定年制度もなくなっている
- ・ 循環技術の向上により上・下水かかわらず飲料可となり、太陽光・原子力等の発電も不要になっている

＜環境・交通＞

- ・ AI技術の発達により家事が楽になり、時間にゆとりが生まれ、生活が楽になった
- ・ AIタクシー等で自動運転化が進んだことで移動が楽にでき、車が減少
- ・ 観光都市として、カジノや娯楽施設ができ、滋賀まで船で移動できる
- ・ 京阪と近鉄がつながり、鉄道路線が大阪まで繋がっている
- ・ 井戸水と宇治川を利用した水路を市全域に配備し、その水路を使った水力発電と太陽光発電により電気・水道代が無料になっている

＜地域＞

- ・ 生活に余裕と時間が生まれたことで、地域活動やサークルに参加する人が増加
- ・ 世代間を超えた関わり、集まりが出来ており、人と人とのコミュニケーションが盛んに行われている
- ・ 地藏盆等の町内会・自治会活動はなくなりつつある
- ・ 地球温暖化等による天災の増加で、地域での助け合いが必要になっている
- ・ 高齢者が地域内で子供の見守り等のボランティア活動に参加
- ・ 活動の拠点は小学校の空き教室や廃校、空き屋を有効活用
- ・ 技術革新により道具があれば短時間で簡単に建物が建設・撤去が可能となったことで、広場さえあれば、コミセンや公民館等の施設は不要
- ・ 宇治市に住む外国人の増加により、国籍を超えた国際的なコミュニティが形成
- ・ それぞれの地域に合ったコミュニティが出来ている

<教育>

- ・小・中・高といった区切りや学校単位の教育制度ではなく、個人や個性が重要視され、個々の得意分野や専門的な分野の勉強ができる環境が整っている
- ・飛び級制度ができ、ICTの発達により学校に通わずとも単位の取得が可能
- ・学校の枠組みが変わり、人材教育に重点が置かれたことで、自分で考え、行動する人材が育成されている
- ・インターナショナルスクールができ、子どもが海外に宇治の魅力を発信する
- ・様々な勉強が出来る学びの場を設ける事で、自らが進んで勉強する社会を作る
- ・市内に多くあるお寺で母親が教育を行う（寺子屋）ことで、公民館や集会所等の施設が不要

<その他>

- ・ドローンで災害の対応や予測ができるようになっている
- ・行政に頼らないことで、行政がコンパクト化し、市の職員数も減少している
- ・行政がわかりやすくなり、住民とのやり取りがしやすくなっている
- ・主要都市へ人口の集約化により、「宇治市」という地域・概念がなくなっている

2048年の宇治市の地域コミュニティの姿

- ◇ 2018年の地域より小さい範囲で独立した個性のある地区の誕生
- ◇ NPOが中心となり、小学校を拠点とし、子供からお年寄りまでの多世代が集い、地域課題を解決していくシステムが構築
- ◇ 市から地区（地域組織）へ権限が委譲され、自立した小規模コミュニティができている
- ◇ 安全が守られることで、安心して暮らせるまちになり、安心が幸せにつながっている
- ◇ ベーシックインカムを導入により、ワークシェアが広がり、自由な時間が生まれている
- ◇ コンピューターの発達により言語の壁はなく、またICT活用により、国籍や年齢を超えたコミュニティが形成されている
- ◇ お母さん（＝子育てをする人）を市が雇用し、お母さんになりたくなる町を目指す
- ◇ 個々の所有から共有する時代への変化

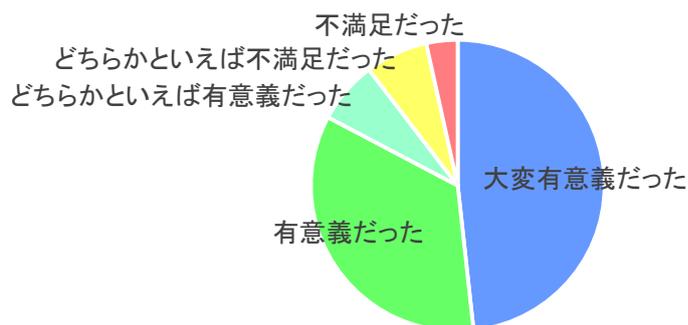
V. 参加者アンケート結果集計

アンケート回答者数 29名

40代以下	9
50代	3
60代	7
70代以上	10

Q. ワークショップに参加していかがでしたか。

大変有意義だった	14
有意義だった	10
どちらかといえば有意義だった	2
どちらとも言えない	0
どちらかといえば不満足だった	2
不満足だった	1
非常に不満足だった	0

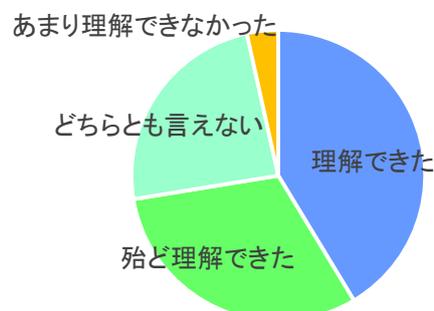


Q. 1の回答理由

- ・ 30年後の未来を考えて、今我々が何をすべきかを考えることが出来た
- ・ 今に生きる者の責任を学んだ
- ・ 様々な考えに触れることが出来た
- ・ 年代の違う方たちとの交流は有意義だった
- ・ 自分の置かれている立場がよく分かった
- ・ 将来を考えることの意義を強く感じた
- ・ グループ内の意見の統一が困難だった

Q. 「フューチャー・デザイン」という手法は理解できましたか。

理解できた	12
殆ど理解できた	9
どちらとも言えない	7
あまり理解できなかった	1
理解できなかった	0



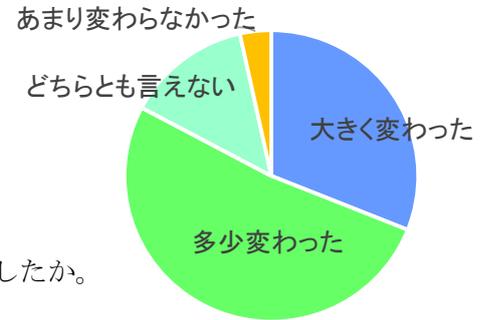
Q. 3の回答理由

- ・ バーチャルからリアルへの展開ができた
- ・ 理解できたが、実際に将来世代として振る舞うことは難しかった
- ・ 未来までのプロセスと参加者それぞれのアイデアを統合していくことが難しい
- ・ 「未来」がすぐにイメージできなかった

- ・ フューチャー・デザインのポジティブなイメージを発想しにくかった

Q. 「フューチャー・デザイン」という手法を体験して、考えに変化は見られましたか。

大きく変わった	9
多少変わった	15
どちらとも言えない	4
あまり変わらなかった	1
全く変わらなかった	0

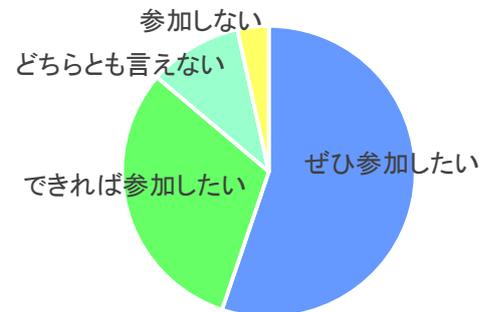


Q. 「フューチャー・デザイン」という手法を体験していかがでしたか。

- ・ ワクワク感があり、面白かった
- ・ 全く新しい思考方法に感心した
- ・ 目の前のことにとらわれないで議論できて面白かった
- ・ 先を考える機会がなかったが、この場によって考えられるようになった
- ・ 何の意味があるのかが始めは分からなかったが、遠くの未来を一度想像して、実現するための手順として、年代ごとに話をしていくことは理解できた

Q. 同様のワークショップの開催があった場合、参加を希望されますか。

ぜひ参加したい	16
できれば参加したい	9
どちらとも言えない	3
あまり参加したくない	0
参加しない	1



Q. その他、ご意見等

- ・ ワークショップに参加されている人たちと出会えてよかった
- ・ 体験する人を少しずつ増やしていくことが、宇治の未来に対し「我が事」として考え、行動する人を増やすことになると思う

VI. 当日会場の様子

